オンリーワン 必見の技 RIO 2016

ピンポイントで崩す

似た軌道 落下点は前後

「バレーボールの必殺サーブ」と言われて多くの人がイメージするのは豪快なジャンプサーブや変化の大きなサーブだろう。しかし、リオデジャネイロ五輪出場を決めた日本代表女子の目指すサーブは違う。象徴が木村沙織主将(28)＝東レ。片足で軽く跳んで打つジャンプフローターサーブは、軌道は真っすぐで派手さはないが、日本代表の大久保茂和コーチは「ピンポイントで針の穴を通せる」と絶賛した。高さやパワーを前面に押し出す海外勢のサーブと対照的に日本らしい正確さと緩急で勝負する。

日本は強豪国と比べて身長で劣る。真鍋政義監督が掲げるのが「四つの世界一」だ。サーブ、サーブレシーブ、スパイクレシーブ、ミスの少なさの4分野を磨いてきた。特にリオ五輪でカギを握るのがサーブだった。

2次リーグ敗退に終わった2014年世界選手権はサーブ権を持っている時の得点率が低く、真鍋監督はコーチの担当を変更した。15年からサーブ担当になった大久保コーチは、男子代表スタッフの増村雅尚・崇城大准教授に依頼して、強豪国のサーブの分析に取り組んだ。

動作解析が専門の増村さんはサーブの軌道に注目した。中国は2・8㍍前後と高い打点から、時速70㌔と速いジャンプフローターサーブを打ち込む。一方、日本は身長185㌢の木村でも打点は2・4㍍ほどで時速は60㌔前後。増村さんは「日本人にはマネできない。独自のものを目指そうとなった」と振り返る。

日本が活路を見いだすのが駆け引きで、それが最も得意な選手が木村だった。木村は相手の表情まで観察して嫌がるコースを突く。レシーブが苦手な選手のカバーに入ろうとリベロが先に動けば、打つ直前に逆の方向へコースを変える。笛が鳴ってから打つまでの時間も相手を見て自在に変える。大久保コーチは「嫌がるところを見つける能力と、どこでも狙える技術を持っている」と評価する。

特に光るのが前後の揺さぶりだ。緩いサーブでも相手を崩せる。普通の選手はコート手前に落とすサーブはボールの軌道が高くなるので、見分けがつきやすい。しかし、木村はコートの手前に落としても、奥に落としてもボールの最高点の高さがあまり変わらない。

「打ち方も軌道もあまり変えないようにしている」と木村が語れば、増村さんは「相手からは見分けがつきにくい」と説明する。

高校在学中に代表入りし、天才タイプに見られがちな木村だが、実は人一倍、練習熱心だ。高い技術を支えるのは基本の積み重ね。サーブ練習では愚直に真っすぐにだけ打ち続ける。練習でフォームが固まっているから、試合では瞬時の応用や精密な制球ができる。

昨秋のワールドカップはチーム別のサーブランク1位の日本だったが、5月のリオ五輪予選では全体的に調子が上がらず、真鍋監督は「もっとサーブで崩さないと」と指摘する。五輪本番で、木村を中心にサーブが機能すれば、2大会連続のメダルが見えてくる。

【小林悠太】

＝随時掲載

バレー女子 木村

きむら・さおり　東京都出身。東京・下北沢成徳高2年時の2003年に代表入り。04年アテネ五輪に初出場。10年世界選手権銅メダル、12年ロンドン五輪銅メダル獲得に貢献した。13年から代表の主将に就任。リオデジャネイロ五輪に出場すれば、バレーボール女子日本代表史上初の五輪4大会出場となる。185㌢、65㌔。

針の穴を通す木村の 緩急自在のサーブ

2016年6月22日　毎日新聞　P.17